北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

北海道教育大学旭川校におけるサイン計画について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八重樫, 良二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006221

北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）第64巻　第２号　　平成26年２月
Journal of Hokkaido University of Education (Humanities and Social Sciences) Vol. 64, No.2　　February, 2014

北海道教育大学旭川校におけるサイン計画について

八重樫　良　二

北海道教育大学旭川校デザイン研究室

About Signs Plan in Asahikawa Campus

YAEGASHI Ryoji

Department of Design, Hokkaido university of Education, Asahikawa campus

概　要

北海道教育大学旭川校キャンパス整備の一環として平成18年度から平成21年度にかけて校舎の大規模な耐震改修工事が行われた際に，校舎の整備に伴って教室名の表示や案内板表示など各種のサインが整備された。筆者はその設置に関わってデザインの原案作成を担い，サイン計画の提案を行った。本稿ではサイン計画実施案の基となったデザイン案についてその概要を記し，大学におけるサイン計画の意義について考察する。

１．サインの役割とその公共性

本稿で記すサインとは端的には看板表示とか案内表示といった，知らせたい場所や建物に関する表示のことを指している。日本では1964年の東京オリンピック開催時に会場のサイン計画に関心が寄せられた頃から，そのデザイン分野について大衆理解が進んだように思われる。一般的には文字や絵記号（ピクトグラム），矢印などにより，場所や方向，また各種の案内に関して何かしらの情報を伝える役割を果たしている。今日，サインは様々な場所で目にして，身近で生活に欠かせないデザイン事例となっている。

例えば総合病院の場合を例にとるなら，そこに初診受付や会計など各種の窓口名，診療科目名，各室名など様々な表示を目にすることができよう。さらには各診療科までの経路を示す案内表示なども加わり，サインの数と種類は多岐に渡っている。そのため互いのサインは大抵，関連性をもって設置されているのが通例である。病院内には多数の部屋があるので，系統的な配置と表示の規則性がその理解を助けるからである。

病院施設のように数多く，多種のサインが設置される場合には何かしらの計画が必要となる。個別のサインをデザインする場合とは異なり，サイン計画ではそれぞれのサインの形態や設置場所，その関連付け，系統立てに関するプランニングが最も重要である。そのこと自体がサイン計画に関するデザインの主要な内容ともなっている。

同時にサインは情報の伝達といった機能的な役割ばかりに留まらず，“らしさ”を表す役割も果たしている。例えば飲食店の看板を見て，カジュ

アルな感じか，高級な感じであるかなど，何かしらのイメージを受けることがある。その店名と看板のデザイン，材質感などにそれらしさが表われているからである。私たちは視覚を通して情報のみならず，趣味的とも情緒的とも言える主観的なイメージを受け取っている。それはサイン表示を通した個性の伝達につながっている。

飲食店の看板などはその個性が表れていることがふさわしく，その店らしさを伝える役割を果たしている。もし全ての店の看板が同じ字体だけで表示されていたとしたものなら，どれほど味気ないものとなるかが想像されよう。このように“らしさ”は店名などの文字情報ばかりではなく視覚的イメージによっても記憶されるものである。視覚伝達に関するグラフィックデザインの分野はこうした視覚的な印象のあり方を探る専門性を持っている。

こうした“らしさ”のイメージ表現に関わって，サインの公共性はそのデザインに影響を与える大きな要因となる。病院をはじめ駅，空港，図書館など，これらの施設はいずれも公共性が高く，そのデザインは公共（パブリック）デザインと呼称される一領域ともなっている。公共的であることは一時の流行や趣味に左右されない，普遍的で善良な価値観を表すことにつながっている。

大学施設もまたパブリックデザインの観点を持って，公共性を意識したサイン計画が望まれる施設の一つである。サインの見やすさ，分かり易さといった機能面の検討に加えて，大学に求められる公共性について考えることが，大学らしさの表現につながるものであり，デザインの質を高める上で有益であるものと考える。その立案は表示の見え方に関するグラフィックデザインの分野だけに留まらず，プロダクトや空間に関するデザイン分野の専門性とも関わる複合的なデザイン行為である。本稿では本学，旭川校におけるサイン設置に至る経緯とその計画の原案となったデザイン案について記し，大学におけるサイン計画の意義を考察する。

2．旭川校におけるサイン設置の経緯

北海道教育大学における各キャンパスの施設整備方針は，事務本部施設課が分掌するキャンパスマスタープランに基づき，全学的な観点をもって進められている。旭川校キャンパスに関して，平成17年度概算要求事項の中で耐震改修工事の予算が認められたことにより，校舎改修に着手することとなった。平成18年度から平成21年度にかけて順次，キャンパス内の主要な教育研究棟の耐震改修工事が進められた。その設計の具体は最終的には壁や床の材料や色，扉や窓など建築に使用する全ての部材の仕様選定にまで至る。筆者がデザインの専門分野に係る教員であったことから，内外装に係る色や仕様を選定する際には意見を求められ，その助言に努めている。校舎内の各室名表示，案内表示に関するサインの整備計画もまたその対象の一つであった。

本学のキャンパスマスタープランにおいてはサイン計画に関する方針の記載はなく，各校キャンパスで対応することとなっている。旭川校においては過去の事例もなかったので，その最初から立案しなければならなかった。改修以前の旭川校内の各室の表示は，部屋のドア上の横木に貼られた部屋番号を示した銅の銘板によって識別されていた。それは小さく目につきにくいことから，多くの研究室では名刺か何かしらの表示をドアに貼付けていたものであった。長らく棟名表示も棟毎の校舎内に関する案内も皆無のような状況であったことから，改修を機会にキャンパス内の表示を一新し改善することが望まれた。

サインの新設は最初の平成18年度末に改修工事を終えた社会科学棟から着手することとなった。先ず，新たに割り振りされた各部屋の部屋番号を付することから始められ，次に部屋番号に対応して各室の室名を決めることとなった。その際には名称付けの仕方に，一定の統一性を図るための調整が必要であった。例えば研究室の名称に関して教科名や専門分野名を付した名称とするか，単に第１研究室，第２研究室といった名称とするか，

などの違いに対する調整である。これまでキャンパス全体の中での研究室の名称を位置付ける必要がなかったので，各室の名称を改めて検討する必要があった。原則的には前者の考えをもって称して，必要に応じてナンバー付けを行う考えに立ち，その具体については関係する教員組織の判断に沿うものとなった。

社会科学棟には国語と社会の分野に関する研究室と学生教育のための演習室があり，それに加えて学務関係の事務室と保健管理センター，閉架図書室などの部屋があったことから，それぞれのグルーピングに沿って，系統的な表示方法を考える必要があった。一般教室，演習室，研究室など部屋の利用形態の別が遠目に区別できることが好ましいものと考えたからである。また事務が直轄する部屋もあってある程度，管理組織に沿った表示も望まれていた。検討の結果，室名表示サインはどれもが同じ仕様として，色の別によってそれを担うものとした。各階毎の案内や棟内案内が必要となることは予想されたが，社会科学棟改修を終えたばかりの時点ではサイン設置の対処は室名表示のみに留まった。今後，さらに改修工事が進む状況を踏まえると単に室名表示だけへの対応では済まず，旭川校キャンパス全体の視点に立ったサイン計画を立案することが望まれた。

しかし，先に記したようサイン計画の立案は複合的なデザイン行為であって，専門的経験の蓄積は重要である。本来，専門家に依頼することが望ましいが，本学の大学運営にあって，その前例は皆無であり安易にそうすることはできないものと思われた。そのため旭川校では筆者が中心となってその作業に取り組み，改修工事の進行に従ってサインの設置を進めることとなった。その最初は室名表示板をデザインすることであった。

3．室名表示板のデザインとその色彩計画

社会科学棟の供用開始を間近に控えた平成19年２月になって，室名表示板設置の見通しが得られた。キャンパス内に置かれるサイン，全体計画の必要を感じながらも当面，必要が迫られる室名表示板のデザインについて実際的な対応をはかる事となった。その際に検討された事項を以下に記す。これらの５つの事項はどのようなサインを設置するにしても考えなければならない要素である。こうした考えは以降に展開された旭川校のサイン計画にも生かされている。

⑴　表示内容…以下の情報を表示する。

ア．部屋番号

（英語大文字１文字と３桁の数字で表される。）

イ．室名

ウ．研究室の場合には教員氏名とその英語表記。その他の部屋は無表示

⑵　表示板の色

表示板に地色を与えて，研究室と演習室などを区別する。表示内容は地色の白ヌキ文字をもって表示する。また非常勤控室や書庫など学務と学術情報の事務が所轄する部屋についてもその別に従って区別する。使用色については当面の色彩計画による。

⑶　グラフィックについて

表示内容に記した情報を示す文字列を経線で区切り３段で示す。部屋番号は小さく，室名を大きく扱って，表示内容に応じて視認性に差を付ける。文字は太ゴシック体で白色表示し，その背景に色を与える。色の与え方に原則を設ける。

⑷　仕様について

室毎にプリントアウトしたプラスチックシートを基盤に貼付け，その上から透明プラスチック板で覆ったものとする。壁面より浮いた状態で取り付ける。設置された基盤の大きさは230mm 角，文字の表示範囲は210mm 角である。

⑸　設置箇所

原則的には各室，ドアノブの右側上方の位置に設置することが想定された。

従前の部屋番号表示は，棟名の英語表記名の頭文字と階高数，及び階毎に付された通し番号を並べた番号がエッチングされたものであった。番号表示の考え方はそれを踏襲することとした。その

一方，新たに表示することとした教員氏名については「教員の退職や新採用による教員名の変更が生じることを考慮するなら，その都度，取り替えを要して不適当である。」とする意見があった。他に「英語併記をすべきである。」とした意見もあった。これら種々の意見を検討して当面の実施案を得ている。図１はその原案であり，より具体的な検討を経て実施案に至っている。

先に記したよう表示板で教室用途の区別を表したいとする要望があった。例えば一般教室と専門に属している演習室を区別して表示したいとするものである。また部屋管理の所轄による区別も望まれることが分かった。こうした要望について，その区分に応じた表示板色を与えて，その色の違いで表すこととした。

表示板の色を指定するにあたっては，今後に設置する室名表示板の色にも影響を与える事が予想された。この先にどのくらいの数の区別が必要とされるのか，全体計画に応じた色の系統立ての中から選択されることが望まれたが，当面は要望される区別について，細分化が過ぎないように気を付けてその使用色を計画した（表１）。その中から社会科学棟については研究室，演習室，大学院生室の３種に加えて，事務組織である学務グループと学術情報グループが所轄する部屋の２種があり，計５種の色を用いた。

この時の色彩計画では区分毎に１色を指定している。ただし研究室だけはグレィッシュトーン[1)]と呼ばれる，灰色みを帯びた地味な印象の色調として，その色相については自由にするものとした。あえて研究室だけは単色に限定せず，多色が表れるように意図して指定している。社会科学棟の後には共通教育棟，図書館・中央棟，自然科学棟の順で数年に渡ってキャンパスの主要な棟の改修工事を進めることが予定されていた。室名表示板をはじめ，種々のサイン設置が必要になることが見込まれ，設置すべきサインの全体イメージを把握する必要が生じていた。

区分	色	DIC 番号
一般教室	青	DIC 140
実習室	青	DIC 140
準備室等	紺	DIC 184
演習室	緑	DIC 172
教員研究室	灰みの調子	多色
大学院生室	赤みの茶色	DIC 496
学務グループ	濃い青	DIC 222
学術情報グループ	青緑	DIC 217
会議室	灰みの黄土色	DIC 509
事務一般所轄	黄みの灰色	DIC 542

表１　表示板の区分と色の割り振り
（表中の DIC 番号は大日本インクの色見本番号）

４．デザイン案の概要

社会科学棟の室名表示板のデザインを考えるにあたっては改めて，大学施設のサインは誰のためのものであるかを再認識する必要があった。これまで学生が学内の見知らぬ部屋を訪ねる時には，学生便覧中に掲載される学内地図を参照することで，その場所を知る事ができた。従前，備えられていた室名と部屋番号が刻まれた小さな銅製銘板はその部屋である事を確認するためのものであ

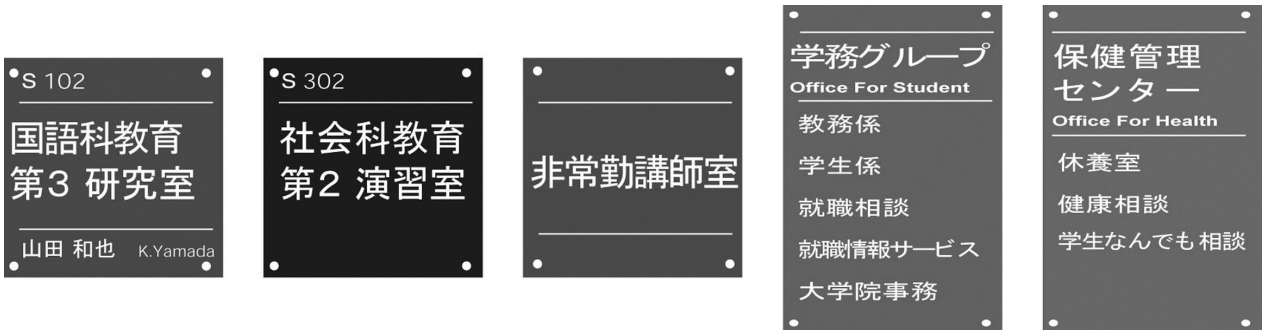

図１　室名表示板の原案

り，実際には確認しなくとも，それほど不都合はなかった。それは室名表示のためというより，施設管理上の都合を満たす役割の方が大きかったようにも思われる。

大学を初めて訪れる訪問者は学内地図を持たない。新入生もまた同様である。入学初日のオリエンテーションや最初の授業開始日には，目的とする教室の場所が分からず，学内をうろうろしている姿がよく見かけられる。学生便覧に掲載される学内地図の事を知らないので，それを参照しないからである。このことを思えば訪問者と新入学の学生を同じ立場と捉えて，学生と訪問者を区別する必要はないものと考えることとした。サイン計画の立案にあたっては大学でのサインは公共的なものであることを念頭に，来学者の視点に立って役立つ案内表示となるよう考えることとした。

大学への訪問者としては，学生の保護者をはじめ，教育関係者，業者，知人など数多くの立場の人達が挙げられる。それぞれ何の目的で何処を尋ねて大学を訪れるのだろうか。これも公開講座参加，事務係への来訪，教員訪問，施設見学など，様々な目的と場所が想定され，それぞれの立場，場合に応じた表示内容が思い浮かぶ。また学内者が来訪者を誘導する場合にはどのようであるか。

このようにサインが誰のためのものであるか，どういうことが望まれているかを想定することの意義は，どういった情報が必要であるか，どの程度の案内内容が望まれるかまたは望ましいか，を思い浮かべ，その重要度を判断できるようになることにある。例えば教員氏名の表示の可否について意見があったことを記したが，表示することにしたのは，教員を訪ねて来た訪問者の立場に立つなら，その情報は欠かせないものと思われたからである。それを不必要と指摘した意見の背景には表示板の取り替えのための手間や費用への考慮があった。こうした経済性や管理上の都合もまた考慮すべき要因である。サインを計画するには本来，このように多面的な観点から検討し，そのバランスを計らなければならない。原案の作成にあたっては，他大学でのサインをはじめ駅や病院など，身近に接する事例を参考とした。例えば地図で目的地を示すなら，最初は広域案内，次には中程度，そして詳細な案内というように縮尺に応じた案内が便利であることは誰もが経験している。同様にスケールに応じたサインを設ける方策が適当であり通例でもある。訪問者の視点に立ち，室名表示の説明で挙げた５つの事項を検討した結果，以下のサインの種別を設ける事とした。それぞれに応じた表示内容と大きさを考え，デザインの関連性を持たせることとした。

(1) 全体案内…敷地地図と各棟内案内
(2) 棟内案内…棟内各階に応じた案内
(3) 各階案内…フロア案内。
(4) 各室名表示…室名，学科名，事務係名等表示
(5) 誘導案内…主要な教室等への方向案内
(6) 屋外設置案内
・棟名表示…棟名称の表示（外壁表示）
・キャンパス敷地全体図…全体案内

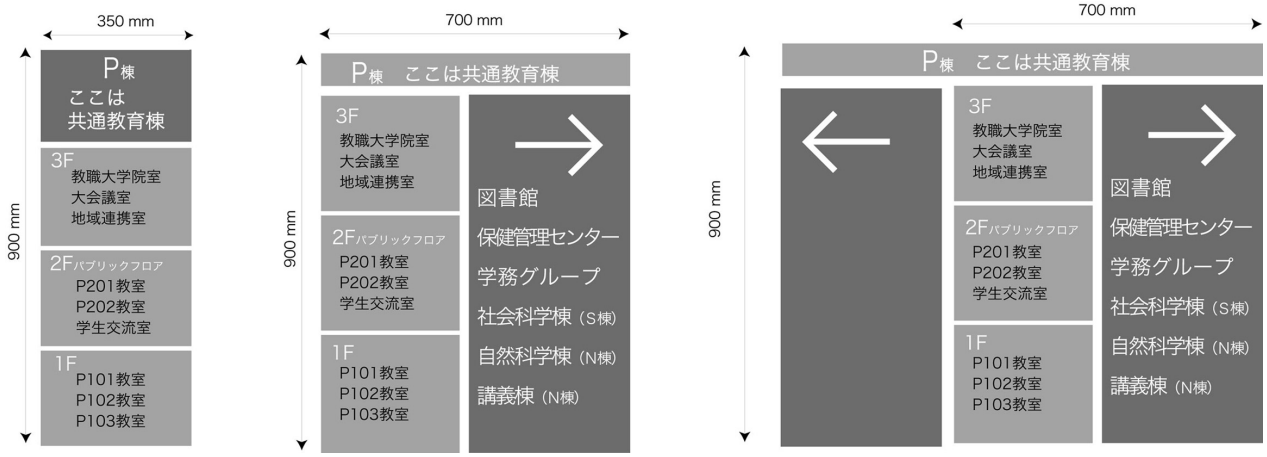

図２　サインシステムの原案（共通教育棟内サインの例）

表示される情報内容はそれぞれであるが，⑴から⑶までの案内表示を役割とするサインには⑸の誘導案内表示での案内情報も一部，含まれることが望まれた。そうすると表示内容が多岐に及ぶため，サイン板も大きくならざるを得なくなる。そのため設置箇所に応じて表示内容が可変できるよう，それぞれのサインを組み合わせて設置することを考えた。

こうした手法はよく見られ，システムサインと呼ばれている。表示内容の増加に対して，幾つかのサインを組み合わせることで対応する考え方のことである。実際には種類別のサイン（エレメント）を一つ一つ，作成して組み合わせる訳ではなく，グラフィックとして組み合わせることを指す。視覚的にシステム化を計ったものである。原案では簡略なシステムとして以下の４つのエレメントを想定した。

ア．現在地表示…棟名と階高数の表示

イ．室名表示…室名，学科名，事務係名表示

ウ．誘導案内…矢印記号と目的とする室名表示

エ．旭川校マークの表示

（実施案では全学のマーク表示と両方を表示）

先に列記した⑴から⑸までのサインは，ここに挙げたエレメントを組み合わせて作ることができる。こうしてサイン計画にあたって基本となる考え方をまとめ，具体的なデザインに取りかかることとした。この時に考えた原案を図２に示す。誘導案内には上階に向かうことを意味する階段記号なども加えて，多様な組み合わせを想定した。

また⑴に挙げた全体案内のサインは原案では高さ2.1m，幅2.7m（実施案では3.4m）として，設置するサインの中では最も大きいものが想定された。サインの中でも中心的役目を担って，そのデザインには，キャンパス全体地図の表示など考えるべき多くの要素があった。その具体化にあたっては制作を請け負う専門業者との意思疎通のもと，互いに協力して実施案を得ている。グラフィックの細かな処理は業者によって作成されて

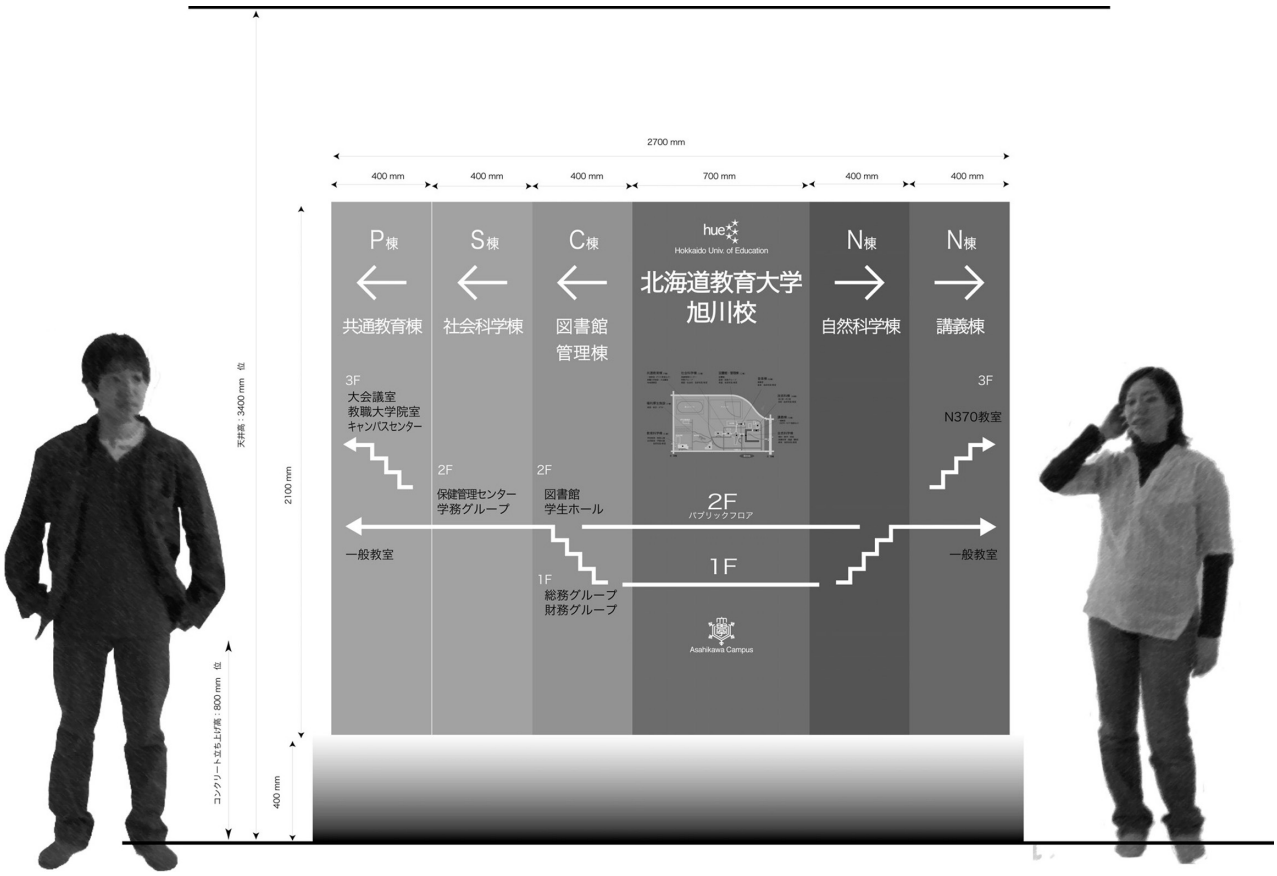

図３　全体案内サインの原案

いる。全体案内表示の原案を図３に，その実施案を図５に示す。改修工事の結果，旭川校の主要な各棟は２階フロアで連結されることとなった。

こうした施設的な特徴を受けて，全体案内の表示においても２階フロアを特にパブリックフロアと名称付け，２階への誘導サインを重要なものとして扱うこととした。繋がった各棟が視認しやすいよう棟毎にテーマカラーを振り分け，棟名称とその略称にあたる英文字記号を大きく扱うこととした。各棟のテーマカラーは全体案内サインにおいて色相がグラデーションに変化するように考えて設定している。

このように全体案内では訪問者の多くが目的とする場所への案内機能を特に果たすことを旨として，その経路を廊下の動線と２階フロアに階段で昇る事を階段状の矢印で図示して，その経路の視覚的理解を助けるよう工夫している。

⑴の全体案内の中で，棟毎に色面分割された各面を切り離して⑵の棟内案内，及び⑶の各階案内とすることが考えられた。特に玄関箇所に設置する棟内案内では，その上下にアの現在地表示とエの旭川校マーク要素を配置し，その間にウの誘導案内の要素を配置することで，縦型で大型のサインとなることを考えた。図３での全体案内と関連して，図４に棟内案内の原案を示す。

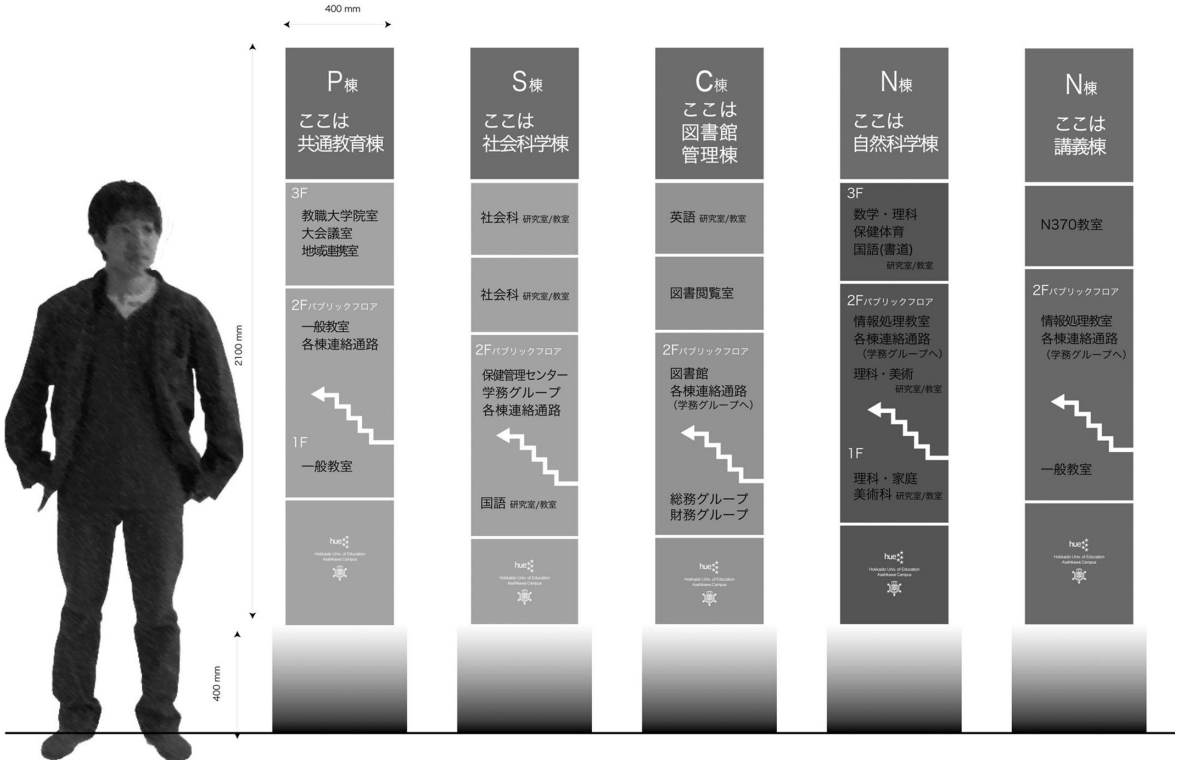

図４　各棟玄関箇所案内サインの原案

棟内案内は高さ2.1m（実施案では1.6m～2.1m），幅40cmとして大型のサインとして想定している。それに比べて階段箇所に設置することを想定した⑶の各階案内は高さを90cmに揃えて，アの現在地表示の要素を組み合わせた表示と考えた。棟内案内と各階案内の地色は全体案内で色分けされた棟毎のテーマカラーに従っている。文字表示については室名表示とは異なり，基本的には黒色で表示される。⑸の誘導案内は各棟に共通するので，灰味を帯びた青色を地色として，矢印または階段記号と案内する棟名や室名などの文字色を白色表示とした。

サイン計画においては，こうした各種サインのデザインとともにその設置方法，設置箇所も考えなければならない。設置については壁面に直付けするより，壁面から１cm程浮かした設置が望ま

しいものと考え，その方法を工夫している。設置箇所の想定は必要箇所を実際に確認しながら計画している。設置場所によって表示内容を適するよう見直し，設置に支障が生じた箇所にはその都度，取り付け方の一部を変更するなど，原案提示の段階とはまた異なる対応が必要であった。

例えば全体案内の場合には詳細にそのグラフィックの処理について検討を深めている。図３に示すよう原案において２階のパブリックフロアを意識した動線表示をしているが，実施案でもその考えを踏襲し，誘導先の地点を増加している。誘目性を考慮してその表示文字に大小の差を付けるなど視覚的効果が高まるよう改善している。併せてバリアフリー化を計るために設けられたエレベーター，車椅子での出入りが可能なトイレ，AED の設置箇所についてピクトグラムによる表示を行った。図５は実施案を基に制作された現状のサインである。図３と比較することで原案と実施案との差異が理解されよう。

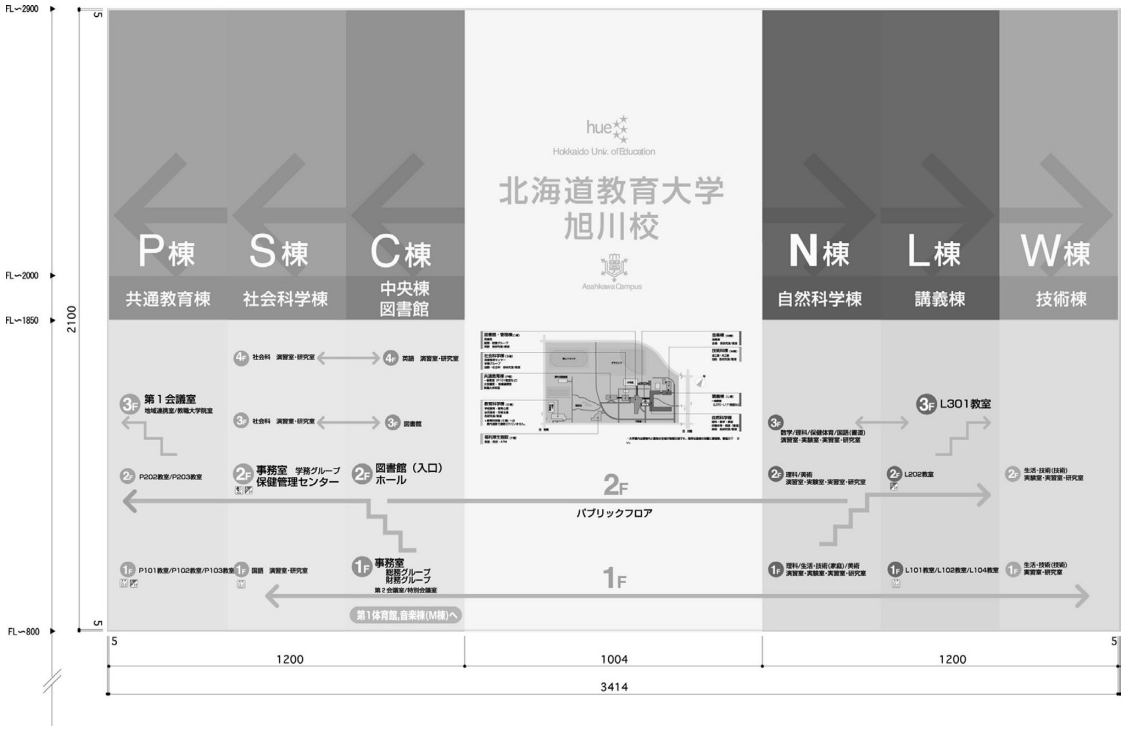

図５　全体案内サインの実施案（実際に設置されたサイン）

５．サイン表示における色彩計画

前記したよう旭川校のサイン計画では，教室や研究室などが区別されることを意図して室名表示板に色を与えている。表示板の色の理由を来訪者が知る必要はないが，その計画性はサイン計画の原則ともなり，サインのシステム化を助ける意義を持っている。その後，改修工事が進むにつれて，表１に示す区分には含まれない部屋が現れ，例外的な区分も設けている。また色指定については色見本をもとに行っているが，表１では現況の表示板の色の類似色として DIC[2] の色番号で挙げた。この時に想定した色の割り振りは必要に応じた案であって，キャンパス全体を見通した色彩計画としてはまだ十分，意識されていないものであった。

何かしらのイメージを色で例えることがよくあるが，仮に施設を色に例えてみると，例えば牢獄であれば灰色のイメージが湧く。また幼稚園なら活気ある明るい色が，老人向きの施設なら落ち着いた色がイメージされることが多い。このように色は施設機能に応じて，そこでよく目にする色の記憶と結びついて連想されるものとなっている。空間演出にとって，色が重要な役割を果たしているものと言えよう。室名表示板の色分けにあたっ

て，研究室の表示だけを例外として多色での対応としたのは，研究室が多く並ぶフロアについて色が単調になることを考慮したからである。室名表示板の色の違いが廊下に変化を与えることを期待して，一定の調子を保った中での変化を与えるよう考えた。

この考えを発展させて棟毎にテーマカラーを与えて，各棟が視覚的に区別されるよう色分けを行った。案内表示の機能的な役割ばかりにとどまらず，キャンパスに彩りを与える役割にも意義があるものと考えたからである。表示板が多種，多数に渡ることに応じてその色彩計画を立案することが必要となった。

既に記したよう，色彩計画の起点となる考えは，社会科学棟，共通教育棟，中央棟・図書館，自然科学棟，講義棟，技術棟の６つの区分に応じた色を与える事であった。全体案内板にはこれらの各棟案内が同時に表されることから，その表示にあたっては虹色のように順に色相が変化するように各棟の色を考えた。このようにして全体案内で用いた各棟の色は，その棟内案内と各階案内でも同じ色を用いることとした。このように全体案内と棟内案内，各階案内の３種の表示板の色は関連している。

それに対して全ての棟に共通して表示する誘導案内は灰味を帯びた青色とした。棟の違いによらず共通する要素の色として灰色を想定して，シンボルマークと現在地を知らせる表示板についてそれを用いている。各棟の色の割り振りについて表２に示す。先の表１と併せてこの２つの表はサイン計画の中での色彩面の計画案を示している。

区分	色	DIC 番号
共通教育棟	黄みのオレンジ	DIC 83
社会科学棟	赤みのオレンジ	DIC 53
中央棟・図書館	淡いピンク	DIC 261
ニュートラル	淡い紫	DIC 71
自然科学棟	青	DIC 221
講義棟	緑みの青	DIC 177
技術棟	黄みの青	DIC 172

表２　各棟のテーマカラーの割り振り

旭川校キャンパスにはこの他に音楽棟や教育科学棟，課外活動施設，福利厚生施設があり，今後はそれらに対応したテーマカラーを設ける事が色彩計画上，必要となることが見込まれる。表中，ニュートラルと記した区分は個別の教育研究棟と対応しないでキャンパス全体に対して設けた色である。ラベンダー色をイメージして，例外的に色を与える際に備えた区分として考えた。色彩計画はサイン表示のみならず，色を与える必要が起きた場合に利用することができる。改修工事の中でロッカールームの新設が計られ，ロッカー上部と立面部には表２の色彩区分に従った彩色がなされた。

６．大学におけるサイン計画の意義

先に大学施設にはパブリックデザインの観点を持って，公共性を意識したサイン計画が望まれることを記した。その良き先例は多数見られる。例えば，名古屋大学ではサイン計画に関する考えをHP[3]で以下のようにその主旨を公表している。

「名古屋大学（以下「本学」という。）がさらなる国際化へ対応し，地域に開かれた大学となるように，また，高齢者及び障がい者を始め，あらゆる人にわかりやすく，利用しやすいキャンパスとするため，本学におけるサインのデザインの共通化に関する計画（以下「サイン計画」という。）の基本となる方針を定める。」

これと同様の主旨の文を早稲田大学のHP[4]にみることができる。以下はその一部の抜粋である。

「早稲田大学は，学生・地域市民が集えるフィールド環境の形成を目指して，地域社会と連携したキャンパス整備を進めています。…早稲田大学の共通のイメージを発信するため…UI（University Identity）システムを使用したキャンパス案内図等を順次導入するキャンパスサイン計画の元，多くの方により分かりやすく開かれたキャンパス作りを進めていきます。…」

上記の二つの文は共通して「大学は地域社会の一員であること」として，そのために「大学があ

らゆる人,多くの人に分かりやすく開かれること」を目指す事，その実現のために「サインデザインの共通化を計っていること」が記されている。この２つの文は大学が公共的役割を果たすことへの意思表明でもあり，パブリックデザインの精神を表していることとしても受け取ることができる。

また早稲田大学での文中に「UI（University Identity）システム」の言葉がある。名古屋大学でも主旨に続いて３つの基本方針が示され，その一つに「本学のアイデンティティを表出する調和のとれたデザイン」を目指すことが記されている。この中の「本学のアイデンティティ」は早稲田大学のUIと同意義である。UIシステムとは大学理念がよく表されるよう，共通化または標準化を計ったグラフィックシステムを指している。

こうした記載からは，両大学はサイン計画が大学のアイデンティティを伝えるものとして重要であるとの認識を持っていることが分かる。学外者に向けたメッセージについて，両大学は「あらゆる人，多くの人にわかりやすく」と考えている。それを視覚的に伝えるのがグラフィックの役割であり，そのデザインの共通性はその大学らしさを伝える事に有効である。例えば大学名を表すロゴマークやシンボルマーク，独自の書体や記号，これらは一連のグラフィックスの基本的要素である。それらを大学が行う全てのヴィジュアルコミュニケーションに使用することで，その一貫性を備える事ができる。サイン計画の立案には本来，これらの基本的なグラフィック要素が必要であり，サイン計画のマニュアル化を計ることによって，その整備とデザインの共通性が大きく計られることが期待される。

またUIは企業活動におけるCI（Corporation Identity）と同様の意味であり，会社を大学に言い換えた言葉である。名刺のように小さなグラフィックから大きな屋外看板，広報誌など，あらゆるグラフィックについて，CIはそれらを統括する意義を持っている。日本では1970年から80年代にかけて特に盛んに取り組まれた企業活動として知られるようになった。それは単に社名表示を新しいレタリングにするだけのものではなく，会社がどういう媒体で，どのようなグラフィックをもって送り出しているのかを再点検し，会社の理念に相応しいものとして改める活動を指していた。その成果であるグラフィックの一新は社外的には社会的認知を高めると共に，活動を通して社内的にも，自社がどういう社会貢献を果たしているのか，その社会的使命について組織自体が再認識する機会となったことが指摘されている。サイン計画はCI，UIの中でも最も主要なデザイン対象であり，UIの観点をもってサイン計画がなされるなら，それはCIと同様の効果を得られる事が期待される。

７．まとめ

改修工事に伴って室名表示板を取り付けることから始まった対応が，他の表示板を設置することとなりサイン計画へと発展した。その際のデザイン案の内容を記した。拙いがサインシステムとして機能することを意図したものであり，本稿ではその概略を報告することが主旨である。最初の室名表示板の設置から既に６年が経過し，その課題も感じている。

例えば色彩計画に記す色の振り分けについて。そのルールに沿った室名表示板の制作がなされるようにするにはどうすれば良いのか，という問題がある。実際，ここで記した色彩計画とは違う色使いが起きている。その理由の一つには研究室を多色対応としたため，その原則が分からなくなってしまったことにある。普通，色は感覚的な属性にすぎないものと思い，色を保持することに対する意識は生じない。他にも表示内容，グラフィックの処理，保守管理など具体について，見直しの必要があるように感じている。これらの課題解決を計る上で，UIとそれに準じてサイン計画が組織的になされることが最も有効であろう。

本学ではサイン計画に関して統括的な指針を未だ定めていない。本学は５つのキャンパスから構成されることにも起因して，キャンパス毎に対応

せざるを得ないのが実情である。実際にその策定に至らずとも，大学における種々のサインを計画的に設置していくことが，公共機関としての大学イメージの形成にとって，大事なことであろう。

先に記したよう旭川校では改修工事以前には室名表示と部屋番号表示のみであった。こうして種々の表示案内に関連性を持たせたサインとしては最初の事例である。現実的にはサインの設置の周期は長期に渡ることが見込まれ，在る程度の期間は現状が続く事となろう。本稿ではその原案について記している。実制作と設置にあたってはそれを請け負う専門業者との応対を通して実施案に至った。また設置箇所によってサインの表示内容が設定されることから，サイン計画においてはその設置箇所の想定も大きな要素となっている。こうした意味では本稿で記したデザイン案は未だ概念的な段階，準備段階の案である。旭川校におけるサイン設置に係る経験が，今後に生かされることが望まれる。そのためには設置されたサイン例について資料化に努めることが大学の施設環境整備にとって有益であると考えている。

註

1）ここで記した色の調子は日本色彩研究所が提唱する色のトーン概念とその区分に倣っている。グレィッシュトーンは灰みの調子の色を指す。

2）色の指定にあたって，幾つかの方法が考えられる。壁面など建築の色指定に関しては，日本塗装工業会による塗装色見本がよく用いられている。ここでは大日本インクの色見本にある色番号，DIC（ディック）番号を付しているが，それは印刷色の指定によく用いられる方法である。一般的には修正マンセル体系における表示法によることが多い。

3）http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/declaration/sign/

4）http://www.waseda.jp/jp/campus/waseda_sign.html

（旭川校　教授）